

「行かないで」がれきの中から母の声 助けられない 「ありがとう、大好き」と伝えた 家族を思い、泣いた



東日本大震災4年 追悼式

私は東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県石巻市大川地区で生まれ育ちました。

小さな集落でしたが、朝学校へ行く際すれ違う人皆が「彩加ちゃん！元気にいつてらっしゃい」と声をかけてくれるような、温かい大川がとても大好きでした。

あの日、中学校の卒業式が終わり家に帰ると大きな地震が起きました。逃げようとしたときは既に遅く、地鳴りのような音とともに津波が一瞬にして私たち家族五人をのみ込みました。

しばらく津波に流された後、私は運良くがれきの山の上に流れ着きました。その時、足元から私の名前を呼ぶ声が聞こえ、かき分けて見てみるとくぎや木が刺さり足は折れ変わりが果てた母の姿がありました。右足が挟まって抜けず、がれきをよけようと頑張りましたが私一人にはどうにもならないほどの重さ、大きさでした。母の助けてほしいけれど、ここにいたら私も流されて死んでしまう。「行かないで」という母に私は「ありがとう、大好きだよ」と伝え、近くにあった小学校へと泳いで渡り、一夜を明かしました。

政府主催の追悼式で宮城県の遺族を代表して言葉を述べる菅原彩加さん。11日午後、東京都千代田区の国立劇場で代表撮影。

宮城県遺族代表

菅原彩加さん 19

そんな体験から今日で四年。あつという間で、そしてとても長い四年間でした。家族を思って泣いた日は数えきれないほどあったし、十五歳だった私には受け入れられないような悲しみがたくさんありました。全てが、今もまだ夢のようです。

しかし私は震災後、たくさんの「諦めない、人々の姿」を見てきました。震災で甚大な被害を受けたのにもかかわらず、東北にはたくさんの人々の笑顔があります。「皆がんばるべき」と声を掛け合い復興へ向かって頑張る人たちがいます。日本中、世界中から東北復興のために助けの手を差し伸べてくださる人たちがいます。そんなふるさと東北の人々の姿を見て、「私も震災に負けないで頑張らなきゃ」という気持ちにいつもなることができます。

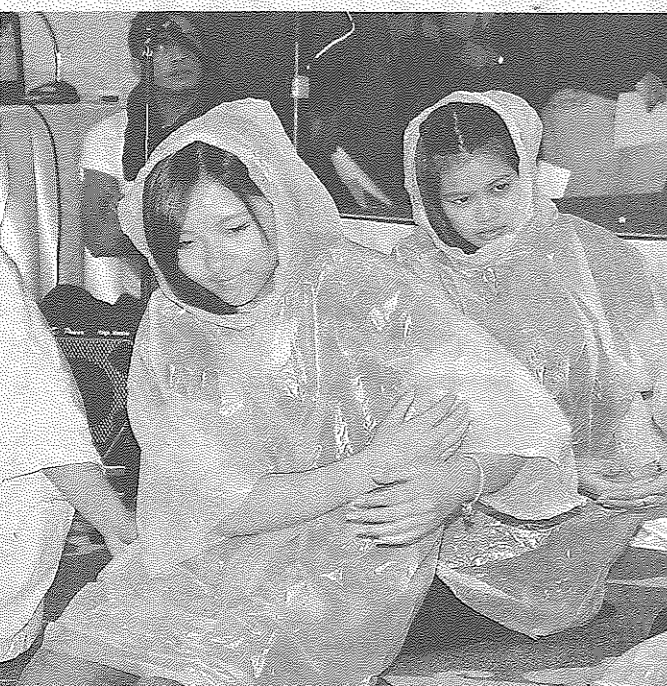
未曾有の大災害となった東日本大震災から十一日で四年を迎えた。各地で犠牲者を追悼する式典が開かれ、冥福を祈るとともに復興を誓った。政府が東京都千代田区の国立劇場で開いた式には、天皇・皇后両陛下や安倍晋三首相、国会議員、遺族ら約千二百人が参列し、地震発生時刻の午後二時四十六分、全員で黙とうをささげた。家族を失った岩手県山田町出身の内館伯夫さん(三〇)、宮城県石巻市出身の菅原彩加さん(一七)、福島県浪江町出身の鈴木幸江さん(三〇)の三人が、遺族代表として、消えることのない悲しみと、前に進む決意を述べた。(全文を掲載)

震災で失ったものはもう戻ってくることはありません。被災した方々の心から震災の悲しみが消えることもないと思います。しかしながらこれから得ていくものは自分の行動や気持ち次第でいくらにでも増やしていけるものだと私は思います。前向きに頑張って生きていくことこそが、亡くなった家族への恩返しだと思います。震災で失ったものと同じくらい、震災で失ったものを私を通して得ていけるように、しっかりと前を向いて生きていきたいと思っています。最後に、東日本大震災に伴い被災地にたくさんの支援をしてくださった皆さま、本当にどうもありがとうございました。また、お亡くなりになったたくさんの方々にご冥福をお祈りし追悼の言葉とさせていただきます。

国内外スピーチ「語る使命」

「ありがとう、大好きだよ」が、津波で生き別れた母への最後の言葉だった。震災当時、中学二年生だった菅原彩加さんは、凜とした表情で式壇に向かい、母と祖母、曾祖母の家族三人を失った悲しみを語った。一緒に流された母が挟まれたがれきは重く、一人の力でどげられなかった。何度も感謝を伝えた後、泳いで離れた。「助けるか、逃げるか、

東京の一般財団法人「教育支援グローバル基金・ピジョンドットコム」の支援で二年間スイスに留学した。この春からは慶応大総合政策学部に進み、ジャーナリストを目指すという。震災直後から菅原さんを支援する同財団の坪内南事務局長(三〇)は「彼女が生きられたのは奇跡。人の痛みが分かる心を大切に、夢に向かって歩んでほしい」とエールを送っている。



昨年6月、バンコクで開かれたアジア防災閣僚級会議の関連イベントでパフォーマンスをする菅原彩加さん(左)と共同

失ったのと同じくらいのものを得ていけるよう、前を向いて生きる